

アフガニスタン考古学の歩み

前田耕作

A Short History of Archaeological Activities in Afghanistan (1922 ~ 1945)

Kosaku MAEDA

キーワード：文化協定、フーシェ、バーミヤーン、バルフ、大唐西域記

Key-words: Cultural Convention, Foucher, Bāmiyān, Balkh, Da Tang Xigu Ji

考古学が自律的な研究活動となったのは比較的最近のことである。考古学が国策の一翼を担って、あるいはイデオロギーの先兵の役割を果たす活動をおこなったことは歴史的な事実である。

いく年にも周辺の列強諸国による干渉を受けつづけたアフガニスタンが、三次にわたる対英戦争の結果、ようやく近代国家としての独立をかちとったとき、国家の自立を保持するためにとった施策の重要な柱の一つが教育の改革と精神的支柱の再発見であった。

アフガニスタンはこの課題の解決に、フランスに大きな助力を求めた。1919年、王位に就いたアミール・アマールヌッラー (Amir Aman Allah) は「平等と自由と人間性の理念に基づく独立国家」の建設には、当時ムスタファ・ケマル (Mustafa Kemal) が押し進めていたトルコ再興運動をヨーロッパ諸国の中でひとり支持したフランスの文化力が必要と考えた。このとき考古学が外交の戦略として使われたのである。

立役者はフランス外務省の事務局長フィリップ・ベルトロ (Philippe Berthelot) であった。彼はエルンスト・ルナン (Ernest Renan) やイポリット・テーヌ (Hippolite Taine) らと親交のあった文人であったばかりでなく、ポール・ペリオ (Paul Pelliot) とも昵懇であり、アジア文化に通じた外交官でもあった。

1921年10月、ベルトロは当時テヘランに駐在していたフランス大使ボナン (C.-E. Bonin) に一通の電文を送った。

「あなたの公式的な立場からすれば、あなた自身がカーブルへゆくことは許されないでしょう。しかしフーシェ氏ならゆくことができ、情報を得ることも接触することも許されましょう。そしてまた、アフガン政府と合意でき、然るべき承認と安全の保証が得られれば、彼ならただちに可能なかぎり早く考古学的調査が始められましょう。」 (Olivier-Utard 1997 : 27)

極秘のうちにインドからテヘランに呼び寄せられたアル

フレッド・フーシェ (Alfred Foucher) は、すでにテヘランに着いていたが、アフガニスタンへの出発は翌1922年1月まで待たねばならなかった。3月、フーシェはメシェドを経てようやくイラン国境を越えヘラートに至り、そこから馬で31のキャラバン宿営地を辿り、6月14日、カーブルに到着した。同年9月9日、歴史的なアフガニスタン・フランス文化協定が調印されるまで、さまざまな折衝がおこなわれたが、それはもっぱら政治的、外交的な駆け引きであった。

交渉の途上で明らかになったアフガニスタン側の緊急な要求、すなわち教育の近代化のために必要なカレッジの建築の要求にフランスが躊躇なく答えることをフーシェは本国に要請した。フーシェ夫人、バザン・フーシェ (Bazin Foucher) はペルシア語とともに学ばれるフランス語の学習要領の作成に力をつくした。

1922年7月、アマーニーヤ・カレッジ (Aminiyya College) の創設はフーシェの交渉に大きな推進力を与えた。またいっぽうでフーシェは、先王アミール・ハビーブッラー (Amir Habib Allah) が自分の大きなトランクの中に貯めこんでいた収集物、とりわけコインのコレクションを分類整理して、将来のカーブル博物館の開設に備える仕事をした。8月1日、フランス政府はフーシェが考古学上の協定をアフガニスタン政府と結ぶことを正式に承認する決定を伝えた。フーシェの努力とそれを支援するフランス外務省のすばやい対応によって、9月9日、かの歴史的なフランス・アフガニスタン考古学協定がカーブルで締結されたのである。条文はただちにマフムード・タルズィー (Mahmud Tarzi)、在パリ・アフガニスタン大使によってフランスにもたらされ、批准される手筈が調べられた。13条からなる協定文書はすでに全文を翻訳し、別書に記載したので、それを参照していただきたい (前田 2002)。

重要なことは、この協定によってフランスがアフガニスタンにおける30年間の独占的な調査・発掘の権利をえた

ことである。「アフガニスタンにおけるフランス考古学調査団」(Délégation Archéologique Française en Afganistan)以後頭文字をとって略称ダファ(DAFA)とよばれる活動母体はこの協定のもとに結成された。ダファの活動を支える組織はその成立の経緯からまずフランス外務省と、ついで文部省と繋がったが、その他に、具体的な考古学的活動に重要な影響力を発揮するつぎの4つの組織と密接な関係をもっていた。一つは1923年1月、アフガニスタン発掘の開始とともに設置された「アフガニスタン発掘委員会」(Commission des feuilles d'Afghanistan)であり、一つはジャン＝バティスト・コルベール(Jean-Baptiste Colbert)によって1663年に創設された「金石文アカデミー」(Académie des Inscriptions et Belles-Lettres)で、そこには当時、エミール・スナール(Émile Senart)、ガストン・マスペロ(Gaston Maspero)、アベル・ベルゲーニュ(Abel Bergaigne)オウギュスト・バルト(Auguste Barthe)、マルセル・デューラフォア(Marcel Dieulafoy)、エルンスト・バブロン(Ernest Babelon)、エドアール・シャヴァンヌ(Édouard Chavannes)、ポール・ペリオ(Paul Pelliot)といった優れたオリエントリストが集っていた。もう一つは「アジア協会」(Société Asiatique)であった。1822年、イギリスの「ベンガル王立アジア協会」をモデルにパリに設立されたこの協会は当時会長にエミール・スナールをいただき、スナールと同じインド学者であったアルフレッド・フーシェはこの協会から大きな力添えを受けた。最後の一つは、1900年に当時仏領インドシナ総督であったポール・ドゥメル(Paul Doumer)の主導によって設立された「極東フランス学院」(Ecole française d'Extreme-Orient)であった。フーシェはかつてこの学院の院長を1905年から1907年まで務めたことがあった。彼の記念碑的な著作『ガンダーラのギリシア的仏教美術』(*L'art gréco-bouddhique du Gandhâra*)の第1巻(1905)はこの「極東フランス学院」の紀要(略称BEFEO)として公刊されたものである。

フーシェは協定書調印直後の1922年9月15日付の外務大臣宛の報告書の中に、アフガニスタンにおいて開始されるべき考古学活動のプログラムをつぎのように開陳している。

「アフガニスタンの国土は、私たちの関心からすれば、重要さにおいて変りのないつぎの五つの地区に大きく分割することができる。一つはカーブル地区、二つめはバクトリア地区、三つめはヘラート地区、四つめはアフガン・セイスターン地区、五つめはカンダハール地区である。これら五つの地区のうち、もっとも出費が少なく、すぐにも見返りのある地区の調査の許可がいただきたい。

1) これまでに知られており、かつすぐにもく発掘でき

る遺跡がもっとも多く存在するのはカーブル川の流域である。西方はハザラジャートの山稜に発し、東方はインド・アフガニスタンの境に至るまで、北方はバーミヤーンとベグラムから南方はガズニーを含む地域一帯がそれに当たる。これらの地方はカーブルの周辺ほぼ150kmの範囲内にある。道はどの道も殆ど車を通すことができ、それによって地方と首都とが結ばれている。ペシャワールを通過して国外へ出るには、かなり費用がかかるとはいえ、比較的輸送は容易である。これらの道こそ、かつてアレクサンドロスが踏みしめ、ギリシアの支配を世紀の初めまで持続せしめたものである。

またここには、とりわけ今日まで知られてきている仏教遺跡がある。しかし、中国の求法僧たちはそこにヒンドゥ教の寺院があることを指摘した最初の人びととなった。ジェララバードとカーブル周辺の多くの仏塔は、すでに1830年と40年の間にヨーロッパの美術愛好者たち、ホニッヒベルガー(Honigberger)やマッソン(Masson)といった人びとによって盗掘されてしまっている。しかし彼らの盗掘は明らかにく仏塔>と思われるものに限定されており、ガズニー、ベグラム、バーミヤーンといった遺跡にまでは及んでおらず、これらの遺跡は手つかずのまま残されている。少人数でも活動的な隊ならこの地域では1年中仕事をする事ができる。冬になれば雪の殆ど降らないジェララバードで、夏来りなばバーミヤーンとかガズニーといった山岳地帯でという具合に。

カーブルに調査隊の拠点があれば、調査を始めるに当たってアフガニスタン政府、フランスの関係機関、外国公使館などとも頻りに折衝できるという望むべくもない利点もあろう。というのも、われわれが何をしているか、そしてわれわれの発掘が稔り多いものだとすることを世界中の人びとに知ってもらうことがそもそも重要だからである。政治的、科学的、地理的、実的なすべての理由からいっても、わが考古学隊の作業の最初の舞台としてこの地方が選ばれば益するところは大きい。そして、考古学隊の計画に重大な支障はいまのところなにも生じていないこと、その計画をわれわれが予約したとしても誰も不快にさせることはないということを付言しておきたい。

2) 私が提案した選択は的を射ていると思うが、私とてバクトラ(Bactra)という名だけが、遠くから見ればヨーロッパ人にとってこの上もなく霊力があり、

魅惑的な力をもっていることを認めるのにやぶさかではない。しかし忘れてはならないことは、これだけではこの問題は片づかないということである。というのは30年以上も前から、中央アジアの最高の学術的探検家オーレル・スタイン (Aurel Stein) 卿がアフガニスタン政府にバルフ (Balkh) 発掘の認可を請願しているという事情があるからである。われわれがスタイン卿の生涯の夢を故意に妨害したとなれば、学問の世界において世界中の非難が湧き起こることにもなる。また、いちどバクトラの幻影を捨て去ってありのままに事態をみつめる必要があるであろう。バルフはここから30行程のところであり、しかもヒンドゥクシュの山壁が立ちはだかっているのである。時間からしても費用の点からしても、カーブルからの遠さは、カーブルがパリから遠いのと殆ど同じだとさえいえるであろう。私がテヘランで如実に知ったことであるが、スーサ (Susa) でなされたことは、それはあたかも別の世界でおこなわれた発掘であったかのように、まったく誰にも気づかれなかったのである。ここでも状況はそれと同じようなものとなるであろう。そうすれば、フランス考古学隊が不活発だと言いつらす地悪い風評も生じよう。ともあれ、カーブル側とバクトリアの両方で同時に作業をする必要があると思われる。ということは、実際には2つの隊とそれに見合う二倍の予算が必要だということである。それに私が集めた情報を総合すると、バルフの土丘は広大で試掘として少し掘り下げるだけでも、多くの年月と莫大な費用が要するということである。土を運ぶ作業を籠でおこなわなければならないとすればなおさらのことである。デコヴィルの小さな鉄道をバルフに輸送するとしても結局費用がかさむことになるであろう。しかも長くかつ費用がかかる発掘が然るべき成果をうるためには、イスラームと仏教の文化層の下方に、ギリシアが支配していた時代、あるいはゾロアスターの時代の残址に到達する必要があると思われる。それはこのうえもなく魅惑的な希望ではあるが、問題も多く孕む仕事でもある。しかも、頻繁に災禍を蒙り、つねにどこかを占拠されてきたバルフの遺跡が、われわれに、かつてバクトリアの名を高めていた他の〈千の町〉、今日ではその大部分が放棄されているが、それよりも幸運な驚きを残してくれている、などということを裏づけるものはなにもないのである。以上すべてを勘案したうえで、私はつぎのような評価を下したいのである。状況がことごとく明らかになるまでは、慎重な姿勢を保持

することが望ましいと。いまの期間は、パリで所轄の方々と相談され、人間と費用に関わるわれわれの方策を査定されるのに必要な時間かと存ずる次第である。

- 3) 発掘作業はバルフでは毎年二つの時期に中断される。いずれも二ヶ月間であるが、凍てつく冬季と灼熱の夏季である。私が先に触れたアフガニスタンの3つの地域では、冬季を除けば作業にはなんの支障もない。したがって、そこでは考古学的踏査をするよりも、いまずぐ発掘をすることの方がよいかと思われる。私がかくも早く結論めいたものを出さなければならなかったのは、つい最近、ヘラート地域とハリー・ルード川の河谷はあまり見込みがないことを確認できたからである。アラコシア (Arachosia)、つまりカンダハール地方も、私の確かめた限り、古代アレリア (Areia) 以上には過去の遺跡を有してはいないであろうと思われる。しかしそれでもそこを訪ねる必要はあろうことかと思われる。とはいえ、もっと遥かに心惹かれる地域があるが、それはアフガン側のセイスターンである。そこには多くの廃墟があることはすでに指摘されている。その廃址はアラブとムスリムの文化層に覆われていると思われる。その下におそらく古のスキタイ系民族の入植者たちの混成的な文明の残滓が見つかると思われる。それゆえにこの地方はその古名サカ・スターナ (Saka-sthana) と呼ばれているにちがいない。ついでながら付言しておきたいのであるが、カーブルは良好な道路によってカンダハールと結びついており、アフガン側パロチスタンからペルシアのドゥズアープまでイギリスの鉄道が延長されれば、もしそれを国境の当局者たちが支援すればの話だが、アフガン・セイスターンの通路、というより折り返し路といった方が適切だが、その路は比較的容易に早く往来できる道となるだろう。ともあれ、この開発がなされないかぎり、われわれがいかなる遺跡へも手を出すことは実質的には不可能である。ということは外国の踏査者が提出するかもしれない要求に反対することもまた不可能になるということである。それゆえ重要なことは、カンダハール～セイスターンの踏査をフランス考古学隊のプログラムの上位に位置づけておくことである。」(Olivier-Utard 1997: 321-330, Annexe 2.)

このフーシェの報告は、文化協定の中味を具体化してゆこうと、どこからフランス考古学隊は発掘を着手すべきかをめぐって、周辺の諸事情を睨み合わせて、もっとも妥当な方策を提案し、その早急な承認を本国政府から取り付

けようとするものであった。フーシェはつぎのような要約でプログラムの方針を締めくくった。

「第一に、できる限り早急にわれわれによる着手を宣言し、カーブル地域で最初の調査にとりかかることである。その範囲は先に明示した通りである。

第二は、バクトリアに関するもので、われわれは、バクトリアにおいて第一級の学者であるオーレル・スタイン卿によって率いられる隊、おそらく十分な資金をもつ隊だろう、に対していかなるものにしる意図的な妨害をするという愚を冒すことのないよう用心しなければならない。しかし、バクトリアの他の場所、とりわけバクトラとオクサス河の間の地域についてはわれわれはわれわれの権利を保有するものとする。もっと正確に言えば、1886年、英・露国境画定委員会のイギリス側メンバーによって指摘されてきたバルフとパタ・ケサル・テルミズ (Pata-Kesar-Termez) の渡船場とケリフ (Kelif) の渡船場とを繋ぐ道路沿いの遺跡については、われわれはその権利を保有しているということである。そしてアフガニスタン政府がこの地域におけるイギリス隊の活動を認めることを断固として拒否することが明らかになった場合には、こんどはまた他国の人びと、例えばロシアやドイツの人々によってかならずや望まれている遺跡に関しても、その地理的条件からしても、物理的条件からしても必要とされる莫大かつ長期的な財政的努力を断固としてなしとげなければならない。

最後に、この国の他の地域に関していえば、ごく短期間に考古学的調査の旅行を実施する準備を進めておく必要があると思われる。その旅程は行きはカンダハールとヘルマンド河谷を通過してアフガン・セイスターンまで行くものとなる。もしこの計画が外交的に調整されるとすれば、ペルシア・セイスターンを経て、ドゥズアープの鉄道を使って、クエッタ、デラ・イスマイル・ハーン、そしてペシャワールを通過して、帰ってくるのが可能となる。その際にはアフガン国境の周辺にあると思われる遺跡も観察することができるであろう。」

フランス外務省の所轄大臣にあてられたフーシェのこの報告は、フランソワーズ・オリヴィエ＝ウタール (Françoise Olivier-Utard) の『政治と考古学』 (*Politique et Archéologie*, Editions Recherche sur les Civilisations, Paris, 1997) の補録2 <フーシェ報告7> (Annexe 2: Rapport d' A. Foucher n° 7) として初めて公表されたものである。

1922年10月、協定はまだ正式に批准されていなかったが、フーシェは報告書で提案した通り、カーブルを中心とした彼のいわゆる第一地域で調査を開始した。イギリスの最新の地図と19世紀にアフガニスタンに入った探検的な旅行者たちが残した地図や記録を手掛かりにしながらの遺

跡の分布調査であった。スルフ・ミナル (Surkh Minar)、ミナリ・チャクリ (Minar-i Chakri)、セー・トゥパーン (Seh Tupan)、そして11月1日から9日にかけては、国王の特別の許可をえてパーミヤーンを初めて訪れた。この調査の結果をカーブルに帰ったのち、フーシェはアジア協会会長スナールに宛てた書簡にしたためた。

「国王陛下の親しきお許しをえて、私はヒンドゥクシュの摩崖に刻まれた巨大な仏陀の像により久しく名を轟かしてきたかのパーミヤーン溪谷を訪れることができましたことをまずもってご報告申し上げます。ここに11月1日より9日まで滞在し、数多くの考古遺跡を短時間ではありましたが調査することができました。大部分のものは、1200年も前、求法の旅の途次この地を訪れた中国の僧玄奘によって言及されたものでした。もちろんこの貴重な手引きから洩れているものも若干はありますが、注目に値するものです。それらのものについての見聞の概要をご報告申し上げますが、この山深く貧しい国にこれだけの遺跡が思いもかけずまだ存在し、それらがわれわれに投げかける謎を、これからじっくり解き明かす必要があります。」 (Foucher 1923a)

フーシェのこの書簡は、彼のいう第一地域における最初の本格的考古学的調査のきっかけをつくる歴史的に重要な記録となった。

パーミヤーン滞在の後、フーシェは玄奘がバルフからパーミヤーンへとやってきた古道を逆に辿り、アク・ロバート (Aq Robat) 峠 (3600m) を北に昇り、コタル・スム (Kotal Sum)、ソフタ・チナル (Sokhta Chinari)、ダフネ・サラヤク (Dakhne Sarayak)、デーヒマ (Dehima)、コタル・カブチ (Kotal Kabuchi)、サイガン (Saigan)、ダダン・シカン (Dandan Shikan) 峠 (2800m)、ラガキ (Laghaki)、ルイサンク (Ruisang)、ポイヨンバフ (Poiyonbakh)、サルムーシュ (Sarumush)、マードゥル (Madr)、そしてカラ・コタル (Kara Kotal/3200m) に至る。峠の稜線の落ちこんだところに岐路があったが、フーシェはこの岐路の右手の道を下った。ソルフ・カラ (Sorkh Kara)、ポエタンギ (Poetangi)、そしてドゥアベ・シャー (Doab-i Shah) まで下ったとき、彼は初めてカラ・コタルの岐路の左手の道がダラ・ユスフ (Dara Yusuf) 川の源流域で、やがてはバルフ川に合流してバルフに至る玄奘の道であることを知るのである。玄奘が縛喝国 (バルフ) より南行して掲職国 (ガチ) に至り、掲職国より東南して大雪山 (ヒンドゥクシュ) に入る道程のうち、まったくの未踏査地域として残されているのが、カラ・コタルからチャイル (Chail) を経てシャール・アウリア (Char Aulia) に至る道である。掲職 (ガチ) の所在地とともにこの道程がこれからの調査にゆだねられてい

る。

フーシェは玄奘の道程のすべてを辿り直すことができなかったが、フルム (Khulm) の河谷に下ったことでドゥアベ・シャーの北方 3 km、ルイ (Rui) に至る道の河溝にドゥフタリ・ヌシルワン (Dukhtar-i Nushirwan) の遺跡の所在を初めて確認することができた。その後この遺跡を訪れ調査したのは、フーシェのバルフ発掘を支援するためにフーシェの道を辿ったジョゼフ・アッカ (Joseph Hackin) (1924 年) と名古屋大学隊 (1964 年) だけである。

フーシェはやがてハイバーク (サマンガ) (Haibak) の仏教遺跡に至った。玄奘の『大唐西域記』にも記録されておらず、バーンズ (Burns) やホニッヒベルガーらの旅行記にも記録されていない遺跡であった。ただ一人マイトランド (Maitland) のわずかな調査記録 (Maitland 1888) があるのみである。フーシェはここでの調査の概要をアジア協会に報告した (Foucher 1924)。のち京都大学はこの遺跡からアフガニスタンにおける考古学的調査を開始することになる。フーシェの調査より 35 年後の 1957 年のことである。

ハイバークよりタシュクルガン (Tashqurghan)、マザリー・シャリーフ (Mazar-i Sharif) を経てテペ・ザルガラン (Tepe Zargaran) の土丘を眺めながら宿望のバルフの都城の中に入ったのは、1923 年 1 月のことであった。フーシェはここに 15 日間留まり、来るべき発掘に備えて必要な調査をおこなった。彼がバルフでの予備調査を切り上げざるをえなかったのは、彼が本国に要請していた人物が、いまもフランスからカーブルに到着するという知らせを受けたからであった。その人物とは建築家のアンドレ・ゴダール (André Godard) とその妻で画家でもあったイエッタ・ゴダール (Yedda Godard) であった。ゴダール夫妻がマルセイユを経てアフガニスタンに着いたのは実際には 2 月になってからであった。2 月 25 日付のゴダールのギメ博物館宛の書信によると、ゴダールとフーシェは出会うとすぐに、ともども馬に乗ってアフガニスタン中を駆けめぐったという。「玄奘の記録を手にし、彼が言及している有名な場所を探し出し、確認して歩いた」と。スタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien) による『大唐西域記』の仏訳 (Julien 1857-8) は十分でないとはいえすでに 1857～8 年に公刊されており、サミュエル・ビール (Samuel Beal) による英訳 (Beal 1884) もそれより後、1884 年に公刊され、またトーマス・ワッターズ (Thomas Watters) の『玄奘のインド旅行記について』 (Watters 1904-5) も 1904～5 年に出版され、アフガニスタンにおける仏教遺蹟の同定に不可欠のテキストとして大きな役割を果たしたのである。また『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』の

仏訳もジュリアンによって 1853 年にすでに公表されていた (Julien 1853)。英訳はやはりビールによって 1911 年に出版された (Beal 1911)。両書がバーミヤーンの調査で最初に参照使用されたのは 1886 年、タルボット、マイトランド、シンプソンらによっておこなわれた調査の際であった (Talbot 1886)。

フーシェはゴダールとともにアフガニスタンの各地を見て廻ったのち、つぎのような結論に達した。

「実際の経験と考察の結果、いまから未来の考古学隊が何にとりかかるべきかが見出せたように思える。十分な資金に恵まれれば、冬にはナガラハーラ (Nagharahara) で、夏にはカピサ (Kapisa) で発掘をおこなうことができる」 (Foucher 1923b) と。1923 年 6 月のことである。フーシェはなお第一地域から着手することにこだわりつづけた。しかし、パリの発掘委員会とアカデミーは、古典資料にしばしば言及されているアフガニスタンでいちばん有名な遺跡、他国の考古学者が発掘を熱望している遺跡バルフ＝バクトラ、「町々の母」の発掘を求めたのである。「西洋の揺るぎなき中心性」(エドワード・サイド Edward W. Said) がフーシェの現場からの発言を掻き消したのである。フーシェは悲しげに記すほかはなかった。「いつの日か幻を追って現実のものを失ったと後悔しなければならないかもしれない」 (Foucher 1942: 154) と。フーシェが婉曲にここに書き記した語句 (*lâcher la proie pour l'ombre*) は実はラ・フォンテーヌ (La Fontaine) の『寓話』(1668 年) の痛切な一くだりを下敷きにしたものであった。

この世ではだれも思いちがいにだまされる。

むなしい影を追いかけているたくさんのばか者がみられるが、いつの時代にもたいていその数がわからないほど多い。

この人たちにはイソップが語っているイヌの話をしてやる必要がある。

そのイヌは、くわえていた獲物の影が水に映っているのを見て、

それを取ろうと獲物を放し、もう少しで溺れるところだった。

川の水はたちまち大きく揺れた。

やっとのことでイヌは岸にたどりついたが、影もほんものもなくなった。(『寓話』VI 17 岩波文庫版)

比喩的表現にこめられたフーシェの苦渋の想いが伝わってくる。フーシェはそれでもバルフへゆくことを躊躇していた。アンドレ・ゴダールは端からフーシェとともにバルフの発掘に携わるものと考えていた。しかしフーシェは動かなかった。そこでゴダールは先にフーシェとともに 3 月

に訪れたパーミヤーンでの調査に旅立った。8月と9月、ゴダール夫妻はパーミヤーンで初めて本格的な調査を開始したのである。発掘委員会がバルフを発掘するフーシェの協力者として指名したジョセフ・アッカンのバルフに赴く途上、パーミヤーンでゴダール夫妻の調査に参加するのは、翌1924年6月になってからのことである。このパーミヤーン調査の成果は『パーミヤーンの仏教古址』(Godard 1928)と題して調査の4年後に出版された。アフガニスタンでおこなわれた考古学的活動の最初の記念すべき結実であり、ダファにとって最初の考古記録であった。しかしゴダールはまもなくアフガニスタンを去り、ふたたび戻ることはなかった。1927年、ゴダールはイラン考古局の局長となる。イラン考古局の年報『アターレ・イーラーン』(Athâr-ê-Īrân)はゴダールの指導下で発刊されたものである。ゴダールのアフガニスタン考古学へのもう一つの寄与は、1923年から25年にかけてフリュリュ(Flury)とともにおこなったガズニーの調査であろう。調査簡報は『シリア』誌に公表された(Godard 1925; Flury 1925)。

いっぽうフーシェは、1923年11月15日、いささか季節はずれの時期になってようやく腰を上げ、これから寒烈な冬が訪れようとしている北方のバルフをめざして旅に出た。それから18ヶ月、1925年7月までバルフに留まり、バルフのバーラー・ヒッサール(高い城)で埒り少ない発掘に従事した。1924年、苦闘するフーシェを支援するため2人の考古学者の派遣が決定された。ガブリエル・ジュヴォ＝デュブレユ(Gabriel Jouveau-Dubreuil)とジョゼフ・アッカンのことである。当時インドのポンディシェリ大学(Pondichery)で教鞭をとっていた考古学者であり、ヒンドゥ教の専門家であったジュヴォ＝デュブレユがカーブルに着いたのは1924年6月28日のことであり、アッカンの来たのもほぼ同じ頃であった。

ジュヴォ＝デュブレユはカーブルで目にしたカピサ出土といわれる諸像に着目し、ベグラムとその周辺地域での発掘の重要性に気づき、とりわけフーシェがすでに指摘していたパイタヴァ遺跡(Paitava)の僧院址の調査にとりかかった。ところが運悪く、そのころマンガル(Mangal)族(カルラーニー・パシュトゥーン)の反乱によって周囲地域の空気が不穏になったため発掘作業を中断せざるをえなくなり、彼は発掘をあきらめ、フーシェに会うこともなく、8月12日アフガニスタンを去った。

アッカンのについては先にも触れたが、6日間パーミヤーンでゴダール夫妻と調査をしたのち、フーシェがパーミヤーンからバルフに至った同じ道を辿り、ドゥフタリ・ヌシルワン遺跡に到着する。そしてフーシェがなしえなかった調査をおこない、残されていた貴重な壁画の撮影をおこなった。この壁画は明らかにパーミヤーン遺跡の壁画と深い

関係が認められるが、壁画の主題はもはや仏教的なものではない。今日では稲葉穰氏が指摘するハラジュ・突厥の移動の経緯との関係で見なおさなければならないかもしれない(稲葉 2003a, b)。

アッカンのバルフに着いたのは7月であった。もはや暑熱のバルフでは発掘をすることは無理であった。アッカンはフーシェ夫妻を残しバルフを離れ、周囲に広がるトハラ(トハラ)の故地を訪ねながらパイダヴァに至った。アッカンはこのときの踏査の貴重なフィールド・ノートを残したが、ノートを保管するギメ博物館はまだこのノートの全面的な公開に踏み切っていない。

12月、アッカンはカピサに帰着すると、パイタヴァを訪れ、ジュヴォ＝デュブレユの未完の発掘を引き継ごうと考えた。不穏な空気はまだ残っていたが、巧みな交渉で切り抜け、冬の寒気で作業が不可能になる前に、大勢の人夫を雇い一気に発掘を進めた。おおざっぱな不完全な発掘だったが、有名な片岩の大きな双神変像が出土したのはこのときの発掘によるものであった。ピエール・カンボン(Pierre Cambon)氏はジュヴォ＝デュブレユとアッカンの発掘とその出土品を整理して改めてこの遺跡の性格を問題にした(Cambon 1996)。

1925年2月1日、アッカンはボンベイ経由でパリに帰った。バルフに残ったフーシェはアッカンの去ったのち熱病にかかり、夫人のバザン・フーシェもまた病いに倒れ、彼らは休息の必要を感じるとともに、バルフを去るときがきていることを悟った。夫妻の帰国の要望に答えて、ベルトロ口から返信がもたらされた。その内容は日本を経由して帰国せよというものであった。「遅くとも仏・日両国政府によって創設される仏・日研究所の開所前、12月1日までには日本に到着さるべし」(5月2日付)というものであった。こうした経緯の末、フーシェはバザンとともに1925年11月、アフガニスタンを発ったのである。田鍋安之助が日本人として初めてカーブルに入ったのは、そのひと月前の10月のことであったことも記録にとどめておきたい。

フーシェの残務を補佐し、フーシェの後任の役割を果たすべくアフガニスタンに派遣されたのは地質学者ジュール・バルトゥ(Jules Barthoux)であった。彼はそれまでエジプトとモロッコで仕事をしてきたが、1925年9月にやってきて、1928年6月までアフガニスタンに留まり発掘に従事することになった。バルトゥの主な業績は3次(1926、27、28年)に渉るハッダの発掘である。ギメ博物館にハッダ室が設けられるのはバルトゥの発掘の成果に基づくものである。それはアッカンの再度アフガニスタンに赴く直前のことであった。バルトゥが帰国後蒙った人生上の痛苦についてはここでは語らないでおこう。

アッカンがふたたびカーブルに姿を現したのは1929年7月19日であった。このときアッカンは夫人のリア・パルマンティエ・アッカン (Ria Parmentier Hackin) と新しいダファの建築家ジャン・カール (Jean Carl) を伴っていた。しかし1929年は、アフガニスタンはバッチャイ・サカーウ (Bacchai-i Saqaw) の乱とナーディル・ハーン (Nadir Shah) のパシュトゥーン軍による反撃で戦火のただなかにあった。戦火の行方をみさだめると、アッカンは1930年5月23日、リアとジャン・カールを伴ってパーミヤーンに赴き、ゴダール夫妻と自分が1923年に手がけた作業を継続するとともに、未調査の石窟を調査し、できれば消失する危険のあった壁画をカーブルに運ぶ計画を立てていた。アッカンは壁画の保存という問題を初めて提起したのである。またジャン・カールによるパーミヤーンにおける最初の発掘、G洞の発掘を支援したのもアッカンであった。パーミヤーンの壁画の剥落には、漆喰いを使って部分的な処理が施された。カクラク谷では多くの天井壁画を壁面から切離して、カーブル博物館とギメ博物館で保存することになった。1933年に出版された『パーミヤーンにおける考古学的新研究』(Hackin 1933a) はカクラクの調査をふくめてアッカンの第二次調査のほぼすべてを網羅している。

アッカンはこの年の10月11日、カーブルを発って、第3代日仏会館の館長に就任すべく日本に赴く。1931年、シトロイエン探検隊にパーミヤーンから加わり、中央アジアを踏破した。ベゼクリク石窟を訪れ調査したのはこの途次のことであった。このアッカンの活動に触発されて美術研究所(東京文化財研究所の前身)の若い研究員尾高鮮之助がパーミヤーンを日本人として初めて訪れ、調査・撮影したのはその翌年、1932年4月のことであった。

1933年、三たびアッカンはカーブルに帰任し、みずからパーミヤーンにおけるK洞の調査をおこなった。いっぽうジャン・カールはカーブル近郊のテペ・マランジャン (Tepe Maranjan) の発掘をおこなった。このときの報告は、アッカンの没後、1959年に『アフガニスタンにおける種々の考古学的研究』(Carl 1959) に収録されている。

1934年、四たびアッカンがカーブルにやってきたとき、彼の資格はダファの所長代理であった。同年にアッカンはカールとともにハイル・ハネ (Hair Khane) を発掘、翌35年にカールはグルダツラ (Guldarra) の僧院址と、フーシェが指摘していたセイスターンのアフガニスタン側地域の調査、そして37年にはパーミヤーン東方の遺跡フォンドゥキスターン (Fondukistan) の僧院址をカールとともに発掘した。これらの成果は先に挙げた『アフガニスタンにおける種々の考古学的研究』に記載されている。アフガン・セイスターンの調査の折、もう一人の建築学者ジャ

ック・ムニエ (Jacques Meunié) とペルシアで発掘に携わっていた考古学者ロマン・ギルシュマン (Roman Ghirshman) がアッカンによって招聘されたことを書き添えておかなければならないだろう。長い間、パーミヤーン谷の見取図として使用されてきた手書きの地図は、1936年にこのムニエによって書かれたものであったことも忘れてはならない。ムニエは翌1939年にショトラク (Shotorak) を発掘し、この地域の片岩彫刻に新しい光を投じた。またギルシュマンは、アフガン・セイスターンのナディ・アリ (Nad-i Ali) でアフガニスタンにおける最初の先史遺跡の発掘をおこない、ダファの発掘領域を拡大したことも記憶にとどめられるべきであろう。

アッカンのアフガニスタンにおける最後の発掘はベグラムでのものであった。1937年から40年にかけて、アッカンはベグラムの発掘に従事しながら、第二次世界大戦の勃発とフランスにおけるヴィシー政権とド・ゴールの自由フランスの分裂という政治的危機に現場で向き合わねばならなかった。

フランス敗北の知らせがカーブルにとどいたとき、アッカンは第5次ベグラム発掘の最中であった。アッカンの職位や活動をめぐっても駆け引きがあったが、最終的にはアッカンは反ナチの戦いを放棄せずというド・ゴール将軍の声明に共鳴し、カーブルの英国大使館を通じて、ロンドンにいたド・ゴール将軍のもとに協力を表明する電文をうった。そしてベグラム発掘にかかわる多くの資料やノート類をイギリス大使館に預け、リア・アッカンとジャン・カールとともについにカーブルを離れ、ロンドンへ向った。1940年の秋10月のことであった。ロンドンで開催された「インド美術展」の機に企てられた一連の講演で、アッカンはベグラム発掘の成果を発表するよう求められた。アッカンを迎えたのは、当時ハンブルグからロンドンへ「ヴァールブルグの文庫」を移したヴァールブルグ研究所所長フリッツ・ザクスル (Fritz Saxl) であった。この出会いによって生まれたのが『ベグラムにおける考古学的新研究』(Hackin 1954) であった。ヴァールブルグ研究所とのコラボレーションによって、特にオットー・クルツ (Otto Kurz) によってなされたベグラム出土の石膏円盤のモチーフと古典世界との比較研究は、アフガニスタン考古学に新しい展望を与えることになった(前田1998)。それは「考古学も多声に耳を傾けなければならない」時代が到来したことを告知するものであった。

1941年2月20日、リヴァプールより任地に赴く途中、乗船ジョナサン・ホルト号がドイツのUボートの攻撃を受けてブルターニュ沖で沈没、アッカンとリアは海中に消えた。そしてジャン・カールもまた4月3日、ロンドン爆撃のとき爆死したという。戦争は遺跡や歴史的記念物だけ

ではなく、考古学者も等しく犠牲にしたのである。

アッカンの没後、ロマン・ギルシュマンは第六次ベグラムの発掘を引き継ぐが、アッカンの作業記録はイギリス公使館より引き渡しを拒否され大きな成果を挙げることはできなかったが、1943年春、ベグラムから7 km のところでエフタル (Hephthalite) の墓を発見し発掘した。出土したコインが改めて古銭学のアフガニスタンのフィールドへの登場を促すこととなった。ギルシュマンはまたクシャン (Kushan) 朝社会とローマ社会の比較の重要性を主張した。これより以後のアフガニスタン考古学の歩みは稿を改めたい。

大戦後、フランスのアフガニスタンにおける考古学的調査の独占権が改めて問い直されることになったのは当然である。ダファにとっては独占権の保持は微妙であったが、みずから改革に踏み切る気運も生まれていた。1966年、アフガニスタンでは初めてアフガニスタン人による発掘がハッダ (Hadda) でおこなわれた。そして翌年、1967年、アフガニスタン考古学研究所がついに誕生したのである。自立したアフガニスタンの考古学は諸外国にも大きく門戸を開きつつ、みずからもめざましい活動を開始するのである。初期のアフガニスタン考古学を主導したのは、イタリアで学んだシャイバイ・ムスタマンディ (Shaibai Mustamindy) と、ストラズブル大学の教授であり、ダファの所長でもあったダニエル・シュルンベルジェ (Daniel Schlumberger) に学んだゼマルヤライ・タルズィー (Zemaryalai Tarzi) であった。日本の考古学隊がアフガニスタンで活動を始めるのは1957年からであり、新しいアフガニスタン考古学の転換期を最初からともに歩いているともいえる。

参考文献

- Ball, W. 1982 *Catalogue des Sites Archéologiques D'Afghanistan*. 2 vols. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
 Beal, S. 1884 *Si-yu-ki, Buddhist Records of the Western World*. London, Truber & Co.
 Beal, S. 1911 *The Life of Hiuen Tsiang*. London, Trubner & Co.
 Cambon, P. 1996 Fouilles anciennes en Afghanistan 1924-1925 Païtāvā, Karratcha. *Arts Asiatiques* 51:13-28.

- Carl, J. 1959 *Diverses recherches archéologiques en Afghanistan (1933-1940)*. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan (MDAFA) Tom. VIII. Paris, P.U.F.
 Flury, S. 1925 Le décor épigraphique des monuments de Ghazna. *Syria* 6: 61-90.
 Foucher, A. 1923a Notice archéologique sur la vallée de Bamiyan. *Journal Asiatique*
 Foucher, A. 1923b Ministère des Affaires Etrangères: MAE 2, 24.
 Foucher, A. 1924 Notes sur les antiquités bouddhiques de Haïbak. *Journal Asiatique* 205/1: 139-154
 Foucher, A. 1942 *La vieille route de l'Inde, de Bactres à Taxila*. MDAFA, Tom. I, 2 vols.
 Godard, A. 1925 Ghazna. *Syria* 6: 58-60.
 Godard, A. 1928 *Les Antiquités Bouddhiques de Bâmiyân*. MDAFA Tom. II. Paris, Les Editions G. Van Oest.
 Hackin, J. 1933a *Nouvelles recherches archéologiques à Bâmiyân*. MDAFA Tom. III. Paris, P.U.F.
 Hackin, J. 1933b *L'oeuvre de la DAFA (1922-1932)*. Tokyo, Maison Franco-Japonaise.
 Hackin, J. 1954 *Nouvelles recherches archéologique à Begram (1939-1940)*. MDAFA, Tom. XI. Paris, P.U.F.
 Julien, S. 1857-8 *Memoires sur les contrees occidentales, traduits du sanscrit en Chinois, en l'an 648, par Hiouen-Thsang et Chinois en Francais*. Paris, L'Imprimerie Imperiale.
 Julien, S. 1853 *Histoire de la vie de Hiuen-Thsang et de ses Voyages dans l'Inde*. Paris, L'Imprimerie Impériale.
 Maitland, P.J. 1888 *Records of the Intelligence Party, Afghan Boundary Commission*. Vol. IV. Reports on Tribes. Simla.
 Olivier-Utard, F. 1997 *Politique et Archéologie*. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
 Talbot, M. G. 1886 The Rock-Cut Caves and Statues of Bamiyan. *Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, vol. XVIII. Part3: 1-28.
 Watters, T. 1904-5 *On Yuan Chuang's Travels in India*. London.
 稲葉 穰 2003a 「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』 281-313頁。
 稲葉 穰 2003b 「ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について」『西南アジア研究』No.58 83-96頁。
 前田耕作 1988「1・フランス・インド学の歩み」「2・アルフレッド・フォーシェ小伝」「3・アルフレッド・フォーシェ書誌」『ガンダーラ考古遊記』同朋舎。
 前田耕作 1998「ヴァールブルグ学派とアジア学」『ヴァールブルグ学派』平凡社。
 前田耕作 2002『アフガニスタンの仏教遺跡パーミヤン』晶文社。

前田耕作

独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所

Kosaku MAEDA

Independent Administrative Institution

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo